

健全なる男性同性愛のかけに

——『コリドン』、『一粒の麦もし死なずば』におけるアンドレ・ジッドの戦略——

黒 岩 裕 市

拙稿『ソドムとゴモライ』における倒錯の二重のゲー
ム」(『橋論叢』、二〇〇二年三月号、六七—八三頁)で
は、マルセル・ブルーストの『ソドムとゴモライ』(一九
二二年)で繰り広げられる男性同性愛の、戦略としての

「倒錯(アンヴェルシオン)」性に着目した。それに続いて
本稿では、ブルーストのテキストに不満を抱いたアン
ドレ・ジッドに焦点を当て、彼が『ソドムとゴモライ』の出
版の後に相継いで公刊した『コリドン』(一九二四年)、
『一粒の麦もし死なずば』(一九二六年、本稿では以下『一
粒の麦』と表記する)という男性同性愛を明確な主題とす
る二つのテキストを取り上げる。ブルーストの「倒錯」性
に批判的なまなざしを向けるジッドはどのような戦略を用
いて男性同性愛に取り組むのだろうか。また、これらのテ

クストを通して、一九二〇年代のフランス文学で男性同性
愛が可視化されていく過程の一端をも探っていきたい。ま
ずはジッドの一九二二年の『日記』に記される両作家の対
談に注目してみよう。

『ソドムとゴモライ』への不満

一九二二年五月十三日、夜のパリ。ブルーストとジッド
が同性愛についての議論を行なう。翌十四日付のジッドの
『日記』によると、最初に対談を求めたのはブルーストで、
到着するとすぐに彼のほうから「ユラニスム
(¹uranisme)」の話⁽¹⁾を始めた。一方、ジッドは一九二〇年
に自费出版した『コリドン』を手渡し、執筆中の『一粒の
麦』に言及する。その夜の論点は同性愛の語り方であった。

自らのこととして同性愛を語らないようにというプルーストのアドバイスを、ジッドは受け入れるつもりはない(L. p.1124)。それから数日後、プルーストが『コリドン』を返す名目で両者はふたたび会う。今回も話題の中心は「ユラニスム」であり、ジッドの『日記』には次のように記述されている。

彼「プルースト」は言った。自分は同性愛の思い出から、優美かつ甘美で、魅力的なものを得たが、そうしたものをすべて『乙女たちのかけに』移し替え、自分の書物の異性愛の部分の素材とした。その結果『ソドム』にはもうグロテスクで、おぞましいものしか残らなかった。自分はこの「優柔不断」を後悔している、と。しかし私が、あなたはユラニスムを公然と非難しようとしたように見えるのだが、と言うと、彼はたいへん傷ついた様子になり、そうではないと抗議した。

(J. I. p.1126)

ジッドの『日記』によると、おそらく『コリドン』を読んだ後のプルーストは、ジッドからの批判を予測していたか

のように、同年同月に出版したばかりの『ソドムとゴモラ I』の弁明を自ら始めたというのである。彼は、同性愛の「優美かつ甘美で、魅力的な」部分を異性愛に転化し、「ソドム」を「グロテスクで、おぞましいもの」としてしか描かなかつたことの非を認める。だが、「ユラニスムを公然と非難しようとした」のではないかとジッドの指摘には強く反論する。ジッドの『日記』を読む限りでは、一九二一年五月の二回の対談は、男性同性愛の表象に関する両作家の隔たりを確かなものにするだけであつたようだ。そこからはジッドがプルーストのテキストに抱いた不満が滲み出ている。

ジッドの不満は『日記』に綴られるだけではなく、『コリドン』にも受け継がれている。とはいえ、『コリドン』の本文にプルーストの名前が登場するわけではない。『コリドン』の舞台は「ユラニスム」の話題で騒々しい二十世紀初頭のフランスである。異性愛者の一人称の語り手が「ユラニスムという腹立たしい問題」(C. p.15) についての見解をはっきりさせるため、かつての友人であつた同性愛者のコリドンを訪ねるところから話は始まり、両者の四回にわたるダイアログと、彼らとは異なる一人称の「私」

が登場する脚注と二つの序文でテキストは構成されている。⁽²⁾
プールの名前が持ち出されるのは、一九二二年十一月
付けの序文の「今こそ語る必要がある」(C, p.8)という
箇所につけられた脚注の中である。そこでは『コリドン』
を公刊する意義が次のように示される。

ある種の書物(特にプールの本)のおかげで人々
は以前よりも怖気づくこともなく、最初は知らないふ
りをしていたもの、あるいは知らないほうがよかつた
と置いていたものを冷静に考えるようになった。……
しかし同時にそれらの書物は人々の見解を迷わせる原
因になったのではないかと私は懸念している。戦争
のしばらく前にドイツでヒルシュフェルト医師が発表
し、マルセル・プールが与する男・女 (Journ.
me-femme) の理論、……性の間段階の理論は間
違ったものではないだろう。しかしそれは同性愛のい
くつかのケースしか説明しないし、同性愛のいくつか
のケースにしか関係しない。私はこの本の中でそのよ
うなものに関わるつもりはまったくくない。すなわち、
アンヴェルシオン「倒錯」、女性化、ソドミーには。

(C, p.8)

この一節でプールは、ヒルシュフェルトが構築した
「男・女の理論」、あるいは「性の間段階の理論」の継承
者と位置付けられ、一方では彼の著作によって、人々がそ
れまで「知らないふりをしてきたもの」、「知らないほうが
よかつたと思っていたもの」(≡男性同性愛)がフランス
で顕在化したことが評価されるが、もう一方でプールの
テキストが提示する男性同性愛が「人々の見解を迷わせ
る原因になったのではないかと危惧されている。もつと
もこの一節では、ヒルシュフェルトの理論そのものが否定
されるわけではない。男性同性愛のすべてを「アンヴェル
シオン、女性化、ソドミー」によって解釈しようとする姿
勢に疑問が投げかけられるのである。そこで本稿でもプ
ールの『ソドムとゴモラー』における「男・女の理
論」(≡戦略としての「倒錯」性)について簡単に触れて
おこう。

『ソドムとゴモラー』では、小説の登場人物であるシャ
ルリュス男爵をめぐって、「植物学者」(SG, p.3)の視点

から一人称の語り手が男性同性愛の解釈を行なう。ゲルマントの館の中庭で、誰からも見られていないと思った男爵の「顔立ち、表情、微笑み」は、男性性を誇示していたそれまでの姿からはかけ離れ、「女のもの」(SG, p.6)であるかのようだった。続いてシャルリュースとジュピアンの情事を覗き見、盗み聞きした語り手は、「その氣質が女性的」であるために、男爵は「男らしさ」を理想とする「種族」(SG, p.16)に属すると断言する。この見解はより一般的に眠っている若い「アンヴェルティ(倒錯者)」の考察へと受け継がれ、「男の体」の内部に「閉じ込められ」た女性性、「無意識」の状態で「表情」や「髪」(SG, p.22)に滲み出る様子が描かれる。「アンヴェルティ」は「男・女」とも言い換えられ、男性同性愛は「男・女」の体内の女性性以外の「男の器官」(SG, p.23)を求めることで、要するに個人の内的な女性性と異性愛の欲望の構図によって解釈される。これが『コリドン』の序文で指摘された「男・女の理論」である。

だからと言ってシャルリュースや若い「アンヴェルティ」の正体が一人の女性だというわけではない。たとえば、シャルリュースの女性性を確信する過程であったはずのジュ

ピアンとの情事の最中でも、なんの躊躇もなく語り手は男爵を「雌」ではなく、「雄」(SG, p.8)と規定する。『ソドムとゴモラー』の「男・女」の中には、その名のとおり、二つのジェンダーが共存しており、「雄」と「雌」の役を次々と交代しながら表面に出てくるのだ。⁽³⁾テクストの後半で「男・女」は、「雄の器官が雌の器官から仕切りによって離された」(SG, p.28)「雌雄同体」(SG, p.31)の動植物にも重ね合わされ、他の「雌雄同体」との結合の可能性が示される。『ソドムとゴモラー』は「ソドム」を経過し、古代ギリシアをも飛び越えて、「原始の雌雄同体性」(SG, p.31)の時代へと「アンヴェルティ」を誘うのである。

同性間のエロスを、個人の内部に秘めた異なるジェンダーによって解釈する見解は十九世紀後半から世紀転換期の言説にしばしば見られる。たとえばドイツの文筆家カール・ハインリヒ・ウルリヒスは、一八六四年、著書『ウィンドクス』の中で、男性同性愛者を「男の肉体の中に閉じ込められた女の魂 (anima muliebris virili corpore inclusa)」と定義し、「ウルニング (Urning)」と名付けた(フランス語の「ユラニスト (uraniste)」の起源である)。

それを受け継ぎ、発展させたのがマグヌス・ヒルシュフェルトである。彼は一八九七年、ベルリンで、世界で最初の同性愛者の解放組織である科学的人道委員会を設立し、性科学者として同性愛を「第三の性」と解釈した。⁽⁴⁾『ソドムとゴモラー』と性科学の言説の間には容易に共通点が見出せるだろう。このような潮流をふまえて、ミシェル・フーコーは『セクシュアリティの歴史』の第一巻（一九七六年）で、「かつてソドミーを行なう者 (sodomite) は性懲りもない異端者であったが、今や同性愛者 (homosexual) は一つの種になった」と述べる。つまり、それまで同性間（特に男性間）のエロスは「ソドミー」という「行為」の「実践」に決定付けられていたのだが、十九世紀後半になると、個人の内部の性質（「内的な両性具有、魂の雌雄同性性」）に基づく見解が出現し、個人の内面へと目が向けられたことで、「一つの過去、歴史や幼少期、性格や生活様式」を持つ同性愛「者」という人格が構築されたのである。まさにシャルリュス一族の誕生である。

『コリドン』と「ペデラスティ」の理論

ふたたび『コリドン』に戻ろう。「男・女の理論」を退

ける『コリドン』で、男性同性愛はどのように解釈されるのだろうか。先ほど引用した序文の脚注は次のように続く。

これらのもの「アンヴェルシオン、女性化、ソドミー」はヒルシュフェルトの理論で満足させておこう。しかしこの「第三の性」の理論は習慣的に「ギリシアの愛」と呼ばれるもの、ペデラスティをまったく説明し得ないだろう。というのも、ペデラスティはどこにも女っばさを含んでいないからだ。(C. p. 8)

『コリドン』が志向するのは、女性性とは無縁な「ギリシアの愛」であり、「ペデラスティ」とも言い換えられる。ただ注意しなければならないが、「アンヴェルシオン」に對抗するために「ギリシアの愛」を持ち出すのは決してジッドの独創的なやり方ではない。当時においてはむしろ一種の常套手段であり、イギリスのエドワード・カーペンターやJ・A・シモンズ、オスカー・ワイルドまでもが援用している。また、先ほど触れたドイツの科学的人道委員会でも、ベネディクト・フリートレンダーはヒルシュフェルトに反対して、男性性によって男性同性愛を解釈し、古

代ギリシアを讚美した。⁽⁶⁾

ところで、「ペデラスティ」という言葉は、フランス語での指示内容は広く、「ギリシアの愛」だけを指すのではない。そこでジッドが『コリドン』で用いる語彙の定義を明確にするために、一九一八年の『日記』で行なわれる男性同性愛者の分類に目を向けてみよう。ジッドは「ペデラスト (pédèaste)」を語源に遡って「少年に夢中になる男」と定義し、彼自身も同一化する。そして「欲望が成熟した男に向かう男」を「ソドミット (sodomite)」、「愛の喜劇の中で、女の役割を引き受け、所有されることを求める男」を「アンヴェルティ (inverti)」と命名し、それらの上位概念として「同性愛者 (homosexuals)」という語を置く。さらにジッドは「ペデラスト」、「ソドミット」、「アンヴェルティ」の三者間には「一方から他方への変質」がある反面、「排斥をともなった嫌悪感」が見られると続け、特に「精神的、知能的な歪み」がある「アンヴェルティ」にのみ「通常すべての同性愛者に向けられる非難」は適応されるべきだと、「ペデラスト」として「アンヴェルティ」への「嫌悪感」を露にする (U1, p.192)。こ

こは「アンヴェルティ」の女性性と病理性が強固に結び付けられていることを確認しておこう。

実際に『コリドン』でも「アンヴェルティ」への「嫌悪感」は随所に見られる。第一のダイアログの冒頭で、語り手は「女性化のしるし」によって男性同性愛を解釈する「専門家たち」の見解に従って、コリドンにも女性性を期待するのだが、彼には「むかつく印象」は見当たらない。逆に彼からは一種の「威厳」(C, p.16) さえも感じられる。一方、『ペデラスティの擁護』(C, p.19) という本を執筆しているコリドンは、医者という設定であり、「恥ずべきユラニスト」⁽⁷⁾ テクストの言葉で言い換えれば「憐れな者、嘆かわしい者、アンヴェルティ、病人」(C, p.28) を診断している。しかし彼も「モル、クラフト・エビング、ラファロヴィッチ」(C, p.18) といった先達が「恥ずべきユラニスト」のイメージを男性同性愛者全体へと付与することには疑念を抱いている。特に一九〇〇年代に世間を騒がせていた同性愛関連の裁判に話が及ぶと、コリドンは「被告人」(C, p.29) = 「犠牲者」(C, p.19) に「グロテスクなところ」(C, p.29) はまったく見当たらないと断言して、

次のように述べる。

「彼らの肉体的な特徴を何度も繰り返したのは、彼らが十分に健全で男らしいということが重要だからだ。すべてのユラニストがそうだとは言わない。……もう一度言うが、私の本では十分に健全なユラニズムを取り上げるつもりだ。さっき君が言ったような『ノーマルなペデラスティ』を」(C, p.30)

「ペデラスティ」には「健全な」、「男らしい」、「ノーマルな」といった形容詞が与えられ、「恥ずべきユラニスト」(＝「アンヴェルティ」)の対極に置かれる。序文で示された「ペデラスティ」と「アンヴェルション」の二項対立が、第一のダイアログではよりいっそう明確になっているのである。

コリドンは続けて、古代ギリシアを援用しつつ、「ペデラスティ」の社会的な有効性を証明しようとする。彼はまずギリシアの彫像を「私たちが美について語るたびに戻ってこなければならぬもの」(C, p.92)と権威付ける。称賛すべき芸術が「花」ならば、「風俗」(＝「ペデラス

ティ」)は「花」を咲かせるために不可欠な「樹液」(C, p.110)である。さらにコリドンはアルタルコス『英雄伝』の「マロピダス」を長く引用して、「ペデラスティ」にも「献身、自己犠牲、時には貞節までも」(C, p.118)が伴い得ると明言し、「ペデラスティ」の正当性を次のように述べる。

「欲望が同性間のものであっても、異性間のものであっても、制御することが徳なのだ。……市民は「男の」友(ami)を持たなければ、国家にとって本当に誠実で役に立つ人間にはなれなかったとは言わない。だが、ユラニズム自体は社会の正しい秩序や国家に対して何ら有害ではないと主張しよう。まったくその反対なのである」(C, p.122)

この一節では同性間、異性間を問わず、性欲を「制御すること」が求められている。それと同時に、古代ギリシアの(男性の)市民にとっての「男の友」の重要性が示唆され、最終的には国益とも結びつけられる。コリドンは、「ユラニズム」(ここでは「ペデラスティ」の意味である)と

「貞節」ではなく、「食欲」と「貞節」との対立を唱え、「夫婦生活の平和、女性の貞潔、家庭の尊厳、夫婦の健康」(C, p.125)が、現代の風俗よりも「ギリシアの風俗」(ペデラスティ)によって保たれると力説する。ところで、竹村和子は『愛について』(二〇〇二年)で、近代社会では異性愛/同性愛の二項対立が規範/逸脱を構築するのではなく、「終身的な単婚(モノガミー)を前提として、社会でヘゲモニーを得ている階級を再生産する家庭内のセクシュアリティ」だけがただ一つの規範になることを指摘し、それを「正しいセクシュアリティ」と呼ぶ。コリドンは二十世紀初頭のフランスにあえて時代錯誤的なやり方で古代ギリシアの「風俗」を持ち出すことで、「ペデラスティ」を「正しいセクシュアリティ」の側へ組み込もうとするのである。

彼はそのために「ペデラスティ」の教育的要素を強調し、「若者」に対する効果を次のように述べる。

「古代の子どもへのユラニスムによる教育が、今日の生徒たちへの異性愛の教育以上に彼らを放蕩に至らしめたと君は本当に考えているのか。もっともギリシア

的なその語の意味において男の友(ami)は女の恋人(amante)よりも青年にとって良き助言者になると思ふ」(C, p.125)

「ユラニスムによる教育」における「男の友」が讃えられるのと同時に、今日の「異性愛の教育」の背後に存在する「女の恋人」が貶められ、導き手としての女性は「若者」にとって「有害だ」(C, pp.125, 126)と何度も糾弾される。そもそもコリドンは動物の雄同士の性行為の必然性を生物学的に説明する過程で、雄の「芸術、スポーツ、歌」への貢献に対して、雌には性的な受動性と「種族」(C, p.74)への献身を定めており、女性の役割は「正しいセクシュアリティ」の基盤をなす「母性」(C, p.113)へと限定される。「母性」を離れた女性は「国家にとって危険」(C, p.122)なものに他ならない。そうなると「求めるよりは求められる、欲望の対象となる」(C, p.128)と形容される「若者」には、性的な能動性を持ち得る男性、とりわけ「年長の男」(C, p.126)が適当となる。コリドンは男同士の「愛」と「単なる友情」(C, p.127)の違いを注意深く指摘するのだが、それにも関わらずダイアログの終盤で

「男の恋人 (amant)」と「男の友 (ami)」は限りなく近づく。年上の「男の友／恋人」は「勇氣への、労働への、美德への最良の誘惑」(C, p.127) をもたらし、「若者」を「励まし、見守る」ことで、現行の「異性愛の教育」が及びもしない「輝かしい頂点」(C, p.128) へと「若者」を導くのである。もっともコリドンは年齢差に基づいた組み合わせだけではなく、「若者」と「同じ年の男の友」(C, p.126) との絆も「ペデラスティ」に含めており、最後は「若者」同士の「友情／愛」に焦点を当て、「ペデラスティ」の議論を次のように締めくくる。

「十三歳から二十二歳は……ギリシア人にとって、愛に満ちた仲間付き合いの、共通の興奮の、もっとも高貴なライバル心の年齢だ。その後になつてはじめて少年はギリシア人の誓いによれば『男 [un homme] 成人男性』になるうとする。すなわち、女のことを、結婚のことを考えるのだ」(C, p.128)

コリドンが提示する理想的な「ペデラスティ」とは、市民としての徳性を受け継がせることを目的とした、性愛をも

含んだ男性だけの教育上の系譜であり、「若者」(『コリドン』の最後の定義によれば「十三歳から二十二歳」までの「少年」) が「正しいセクシュアリティ」の担い手としてふさわしい成人の「男にな」るための準備期間に相当する。

あるいは、コリドンは近代社会の男性のホモソーシャルな絆を書き換えようとしているとも言えるだろう。彼は一方で、古代ギリシアの「風俗」を援用しながら、「男の友」と「男の恋人」を意図的に混合し、「ペデラスト」の輪郭を曖昧にして、少なくとも第一のダイアログでは男性同性愛の下位概念であったはずの「ペデラスティ」を「正しいセクシュアリティ」の規範を支える男性のホモソーシャルな絆の側へと取り入れる。もう一方で、「母性」に限定されない女性(＝「女の恋人」)とともに、女性性を体現した「アンヴェルティ」を「正しいセクシュアリティ」からの逸脱と見なし、男性のホモソーシャルな絆から駆逐する。そのため、語り手が同性愛全体に結び付ける「知能面の欠陥」(C, p.122) を、コリドンは「アンヴェルティ」にのみ押し付けようとする。つまり彼は、「アンヴェルティ」に向かつて、語り手と一緒に強烈なホモフォビアを浴びせ続けるのだ。⁽¹¹⁾ 結局のところ、コリドンの「ペデラス

「ティの擁護」は、「アンヴェルティ」への攻撃と表裏一体になっているのである。

コリドンの最後の言葉聞いた語り手は「さようなら (adieu)」とだけ言い残し、「善良なる沈黙」をもってコリドンの説に答える。「ペデラスティ」論の判断は読者に委ねられ、ダイアログには唐突に幕が降ろされる。博識なコリドンと古代ギリシアに「十分に精通していない」(C. p.113) 語り手との不平等な対話は確かに「ペデラスティ」の価値付けには効果的である。だが、対話という形式の当然の結果として、『コリドン』の「ペデラスティ」は完全に理論上のものになってしまい、実践される余地はない。男性間の性行為自体がテクストで取り上げられるのは、『一粒の麦』を待たなければならぬ。

『一粒の麦もし死なずば』における性行為の実践

『一粒の麦』の出版に関しても、『コリドン』と同様の戸惑いが見られる。いったん第一部と第二部とに分け、一九二一年に私家版として、それぞれ十二冊、十三冊印刷されるが、公刊されるのは一九二六年十月のことである。⁽¹²⁾『一粒の麦』はジッダの幼少時代から婚約に至るまで(一八六

九年から一八九五年)の回想録であり、その第二部が、当時フランスの植民地であった北アフリカを舞台に、「私」と現地の少年たちとの性行為を含んでいる。『コリドン』とは逆に、『一粒の麦』では、男性間のエロスが理論化されることもないまま、性行為の実践が描写される。したがって、『コリドン』の「ペデラスティ」の理論が『一粒の麦』にどこまで適応されるのが争点の一つになるだろう。また、回想録であるがゆえに、このテクストの「私」は語り手と登場人物という二重の機能を担っており、両者の間には数十年の開きがあることにも注意しなければならない。

一八九三年、病弱な「私」は異性愛者の友人ポール・ローランスとともに、「特殊なもの、奇妙なもの (bizarre)、病的なもの、異常なものへの嫌悪感」を抱いて、「平衡の、充実の、健康の理想」(Si. p.271)を求め、アフリカへと旅立つ。アフリカ大陸に足を踏み入れると、「私」は新たな「奇妙さ (étranges)」に驚き、魅了され、『千夜一夜物語』(Si. p.273)の世界に迷い込んだかのように陶醉する。だが現実には、北アフリカの「風」(Si. p.277)や「砂漠」の中で憔悴しきってしまい、「マントと

シヨール」なしでは外出できなくなる。その日もそれらを運ぶために「褐色の肌」(Si, p.278)をした少年アリが同伴する。アリは砂丘に着くと、「マントとシヨール」の上に身を投げ出し、「私」を誘う。ところが「私」はすぐには行動せず待機する。ここで登場人物の「私」に、語り手としての「私」が「今日」の時点から介入する。語り手は、「私」が待った理由を、「好奇心」という曖昧な一語で提示しつつ、「私にはもうわからない」とそれ以上の追及を止める。さらに「私たちの (nos) 行為の……秘められた動機は私たち (nous) のもとをすり抜けてしまう」と単数の「私」を複数の「私たち」に巧みにすりかえて、読者の詮索をも停止させる。そうしたうえで語り手は登場人物の「私」と少年との行為の描写に専念し、次のように述べる。

……彼が差し出した手をつかんで、私は彼を地べたに倒した。すぐにまた彼の微笑みがあらわれた。……服が落ちた。彼は上着を遠くへ投げ捨て、神のような裸で立ちあがった。少しの間、彼は空に向かってか細い腕を伸ばしていたが、やがて笑いながら私に向かって

倒れてきた。彼の体はおそらく燃えるように熱かったのだろう。しかし、私の手には日影と同じくらい涼しく感じられた。砂はなんと美しかったのだろうか。夕方の素晴らしい壮麗さの中で、なんとという光線が私の喜びを包んだことか。(Si, pp.279-80)

服を脱いだアリは「神のような裸」をしており、「おそろく燃えるように熱かった」少年の裸体を抱きしめることで、「私」は「砂」や「夕方の素晴らしい壮麗さ」、「光線」を官能的に味わい、アフリカの自然に同一化しようとする。マグレブの少年との性行為を通して、まさに「健康の理想」が求められているのである。それは確かに、『コリドン』で唱えられた健全な「ペデラスティ」の理論の實踐とも言えるだろう。しかし重大な齟齬も生じている。「ペデラスティ」の正当性の根拠であったはずの年長者から「若者」への男性性の伝授は、『一粒の麦』では反転して、年上の「私」のほうが少年から「健康」という価値を受け取ることになる。一方、植民地の少年は、語り手があえて触れない「私」が彼らに差し出したであろう金銭を別にすれば、何も受け取りはしない。

それに続く一八九五年の「私」の二度目のマグレブ訪問は、オスカー・ワイルドとの再会が中心となる。⁽¹³⁾「私」はホテルの黒板にワイルドの名を見つけ、咄嗟に「羞恥心」(St. p.296)から「私」自身の名前を消してしまうのだが、結局はワイルドと彼の恋人のアルフレッド・ダグラス卿と行動を共にし、彼の手引きでモハメッドというフルート奏者の少年と関係を結ぶ。少年の「野生的で、燃えるような好色で、暗闇のような、完璧な小さな肉体」の傍らで「震えるような歓喜の状態」(St. p.310)に浸りながら、あたかも内部にあった病理性を吐き出すかのように、「私」は何度も射精する。ところが、この挿話には後日談があり、さらにその二年後に再会した少年は、肉体の美しさは保持していたものの、まなざしには「私の知らない何か冷淡で、不安げで、卑しいもの」が感じられ、「好色というよりは厚かましく」(St. p.311)なっていた。今回の逢瀬には「私」のフランス人の友人であるダニエルも同伴しており、三人であやしげなホテルに向かう。そして間もなく「私」の前で始められたダニエルとモハメッドの性行為が次のように描写される。

やがて私にはもうあえぎながら動いているダニエルの両側から下がっている二本の細い脚しか見えなくなつた。ダニエルはマントも脱いでいなかった。とても大きく、ベッドにもたれるようにして突っ立ち、あまり照明には照らされず、背中を向けて、長い黒髪の巻き毛で顔を隠し、足まで垂らしたマントの中で、ダニエルは巨人のようだった。自らが覆っている小さな身体の上にかがんだ彼は、まさに死体をむさぼる巨大な吸血鬼と言つてもいいほどであった。私は怖くて叫びうだった…。(St. p.311)

暗い部屋で「マント」を身に着けたまま、「長い黒髪の巻き毛」をしたダニエルは、世紀末のヨーロッパの雰囲気そのままアフリカに持ち込んでいる。⁽¹⁴⁾それは「私」が嫌悪していた「特殊なもの、奇妙なもの、病的なもの、異常なもの」に他ならない。さらに「私」はアナル・セックスをほめかすことで、彼らの性行為を「私」とアリとの砂漠での行為の対極に置こうとする。闇と光、衣服と裸、人工性と自然性、挿入と接触、病理と健康、死と生、「吸血鬼」と「神」。ここでふたたび語り手が介入し、この場面を振

り返って、次のように記述する。

面と向かって、お互いに、暴力のない快樂しか理解できない私、しばしばホイットマンのようにもっとも素早い接触で満足する私には、ダニエルの戯れは怖かった。そしてモハメッドが彼と同じように気持ち良さそうに遊戯に加わっているのを見て恐ろしくなった。

(Si, p.312)

ダニエルだけでなく、彼との「遊戯」に「同じように気持ち良さそうに」加わっているモハメッドも「私」の恐怖の要因になった、と語り手は分析する。そもそも「私」が北アフリカで求める少年たちは無記名で、同じ名前の付いた少年（アリ、モハメッド）が何人も登場し、彼らは健康の象徴である「褐色の肌」や「野生的な肉体」といったエキゾチックな表面に還元される。その一方で、「私」は彼らとの性行為によって内部の病理性を吐き出し、少年たちの表面＝皮膚との接触から彼らの「健康」を享受しようとする。ところがダニエルとの「遊戯」でモハメッドが見せた「気持ち良さそう」な表情は、二年の間に、少年が称賛す

べきホイットマン的な友愛の世界から、おぞましきヨーロッパの世紀末の側へと取り込まれてしまった証拠となる。モハメッドの嗜好品も「アラブの煙草」からいかにも世紀末的な「アブサント」(Si, p.311) に変わっていた。そのため、ダニエルとモハメッドの性行為は激しいホモフォビアに晒されるのである。アリとの砂漠での場面で、読者の詮索を停止させ、「私」の行為の描写に専念していた語り手は、ダニエルとモハメッドの「遊戯」に「私」が傍観者として存在するこの場面に至って、彼らの行為を貶めることで、「私」の「快樂」をも説明しようとする。これまで見てきたように、『コリドン』のダイアログにおける理論が、回想録である『一粒の麦』の性行為の実践へと移行するのにもなっており、健全さに基づいた男性間のエロスが展開する場も、古代ギリシアから十九世紀末のフランス領北アフリカへと時間的、空間的にずれていく。しかし、男性同性愛を分類したうえで、自らが同一化する同性愛を肯定するために、他の同性愛を否定するという『コリドン』の戦略の根幹は、『一粒の麦』からもはっきりと見てとることが出来る。つまり、『コリドン』の「アンヴェルティ」の役割が、『一粒の麦』では「私」以外の世紀末のヨー

ロッパ人男性に与えられるのである。⁽¹⁶⁾

最後に、本稿の冒頭で取り上げたジッドの『ソドムとゴモラー』への不満に戻ろう。これまで述べてきたジッドの戦略から、プルーストが糾弾される理由も見えてくるのではないだろうか。ジッドは『ソドムとゴモラー』の背後にヒルシュフェルトに連なる「男・女の理論」を見出し、一九二一年五月の『日記』や、『コリドン』の一九二二年版の序文でプルーストへの「嫌悪感」を露にする。確かに『ソドムとゴモラー』の「男・女の理論」は、『コリドン』の「ギリシアの愛」を模範とした「ペデラスティ」や、『一粒の麦』の北アフリカで追求される「健康の理想」からは程遠い。だが、プルーストも単に「嫌悪感」の対象で終わるわけではない。『コリドン』の「恥ずべきユラニスト」⁽¹⁷⁾、『一粒の麦』のダニエルやダグラス卿らと同じように、彼にも「通常すべての同性愛者に向けられる非難」(V. P. 1092)を一手に引き受けさせるための、言わば仮想敵の役割が与えられ、むしろ積極的に持ち出されるのである。ジッドのテクストでは、健全なる男性同性愛のかけに、眨めるべき同性愛が必要なのだ。

『コリドン』の一九二二年版の序文の「今こそ語る必要がある」(C, p. 8) という言葉が示すように、プルーストという好敵手の発見は『コリドン』や『一粒の麦』の公刊に向けての大きな原動力になった。これらのテクストにおける男性同性愛の見解は決して独創的なものではないし、それ以前に男性同性愛を扱った文学テクストがなかったわけでもない。⁽¹⁸⁾しかし『ソドムとゴモラー』に続いて『コリドン』と『一粒の麦』が多くの読者を得たこと、当時のフランスで文学という領域の中心にいた二人の作家が相継いで、しかも非常に明示的な形で男性同性愛に取り組んだことは、同時代の文芸批評を切迫した危機感へと落とし入れた。たとえば文芸雑誌『レ・マルジュ』誌の一九二六年の「文学における同性愛」という特集、フランソワ・ポルシェの一九二七年の著書『あえてその名を言わぬ愛』などが挙げられる。『レ・マルジュ』の論者の多くやポルシェは一九二〇年代に男性同性愛がフランス文学の「流行」となっていることを強調し、きっかけをプルーストとジッドに求める。⁽¹⁹⁾まさに人々がそれまで「知らないふりをしてきたもの」⁽¹⁹⁾、「知らないほうがよかったと思っていたもの」(C, p. 8) を論じさせるより確かな契機となったのだ。一

九二〇年代のフランス文学で男性同性愛の可視性をはるかに大きくしたのは、このような一連の流れを通してなのである。

本稿では以下の略号をもって、引用した文献の出典を示す。

C: André Gide, *Corydon*, Gallimard, 1993.

Si: André Gide, *Si le grain ne meurt*, in *Souvenirs et voyages*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2001.

J I: André Gide, *Journal I 1887-1925*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1996.

SG: Marcel Proust, *Sodome et Gomorthe I*, in *A la recherche du temps perdu III*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1988.

(1) 「ユラニズム」という語は、現在ではほとんど用いられることはないが、ドインのウルリヒスが一八六四年に作り出した「ユラニズム (Uranism)」に由来し、元来は男性間のエロスを「男の肉体の中に閉じ込められた女の魂」によって定義するものである。だが、ジッドは時には男性同性愛全体を示す総括的な言葉として(ここではその意味)、また時には「ペデラスティ」のみを指す語として用

いている。実際にもウルリヒスの定義を越えて、男同志のエロス全般を示す語として頻繁に使われた。

(2) 『コリドン』の公刊に至るまでの経緯を簡単に記すと、まず一九一一年に匿名で『C.R.D.N.』というタイトルで十三部だけ自费出版される。一九一七年から一八年にかけてジッドはさらに加筆、変更を続け、一九二〇年にふたたび匿名で『コリドン』を二十一部印刷する。そして、一九二一年のブルーストとの対談を経て、一九二二年十一月付けの新たな序文が加えられ、本文と脚注が整理されて、一九二四年五月に著者アンドレ・ジッドの名前で『コリドン』が公刊される。その後、巻末の付録として、ダンテと同性愛の問題を主題としたジッドからフランソワ・ポルシェへの手紙(一九二八年)と彼からの返信(一九二九年)、ロン・コホニッキーの手紙(一九二九年)が収録される。『コリドン』の出版に関しては、Patrick Pollard, *André Gide, Homosexual moralist*, Yale University Press, 1991, pp.3-10. を参照した。

(3) ジュデイス・バトラは『ジェンダー・トラブル』で、非異性愛的な「性の文化のなかで異性愛の構造が反復されている場所こそ、ジェンダー・カテゴリーの脱自然化、流動化にとって必要な場所」であり、「いわゆる起源と考えられている異性愛が、じつはまったく社会の構築物である

ことを、はっきりと浮き彫りにする」と論じている。

(4) ジュディス・パトラー、『ジェンダー・トラブル―フェミニズムとアイデンティティの攪乱―』、竹村和子訳、一九九九年(原著一九九〇年)、青土社、六九頁。彼女の見解に基づけば、男性と女性の役割を次々に演じる『ソドムとゴモラー』の「アンヴェルティ」からも単なる異性愛の模倣ではなく、異性愛を「脱自然化、流動化」させるパロディの効果を建設的に読み取ることができる。

(4) ウルリヒスやヒルシュフェルトは男性間の性行為を犯罪と規定するプロイセンの刑法第一四三条(一八五二年制定)、それを継承したドイツ帝国刑法第一七五条(一八七一年制定)と闘っており、同性愛の病理化も抵抗の手段の一つであったことを忘れるべきではない。

(5) Michel Foucault, *Histoire de la sexualité I, la volonté de savoir*, Gallimard, 1976, p.59.

(6) イヴ・コゾフスキー・セジウィックは『クローゼットの認識論』の中で、「男・女の理論」や「第三の性」など二つのジェンダーの顛倒や混在によって同性愛を定義する見解を「ジェンダー移行性」、「ギリシアの愛」といった同じジェンダー内での強い結合を同性愛の根拠とする見解を「ジェンダー分離主義」と呼び、性科学が隆盛した十九世紀後半には確かに前者が支配的になるが、だからといって

後者が消滅するのではなく、それ以降も対抗言説として存在し続けることを指摘する。ジッドのテクストでもこれら二つの見解のせめぎ合いが見られる(イヴ・コゾフスキー・セジウィック、『クローゼットの認識論―セクシュアリティの二十世紀―』(外岡尚美訳)、一九九九年(原著一九九〇年)、青土社、一二四―一五頁)。

(7) Claude Courrouve の著書を参考にそれぞれの語について簡単に触れておくと、「ペデラスト」、「ソドミット」は歴史が古く、中世以降多くの使用例がある。ともに「自然に背いた悪徳」(必ずしも男性間の性行為だけを指すわけではなかった)を行なう者という意味で用いられることが多く、ジッドが『日記』で強調するような違いはなかった。一方、「倒錯者」と訳される「アンヴェルティ」については十八世紀の使用例もあるが、同性間の性愛と強固に結び付けられるようになったのは、シャルコやマニヤンなどを中心とした十九世紀末の精神医学においてである。「オモセクシュエル」という語は、一八六九年にドイツ語圏ハンガリーの作家ベンケルト(ケルトベニーという名前も用いた)が作った《Homosexualität》から派生し、クラフト＝エビングの著作の仏訳などを通じて、世紀転換期にはフランスでも頻繁に用いられるようになった比較的新しい語である(Claude Courrouve, *Vocabulaire de l'hom-*

sexuelle masculine. Payot, 1985)。「オモセクシユエル」に対しては、本稿では原則として一九二〇年代以降その訳語として日本語に定着した「同性愛者」を用い、他の語はフランス語の読み方で表記する。

(8) 竹村和子『愛について―アイデンティティと欲望の政治学―』、岩波書店、二〇〇二年、三七―八頁。

(9) コリドンは、男性に関してはヘテロセクシズムを嘆くのだが(C, p.36)、女性に関しては容赦なくヘテロセクシズムの枠組みへ押し込めようとする。戦略的に「ペダラスティ」と「女性の純粋なイメージ」(C, p.113)、同性愛と「ミソジニー」(C, p.119)を結び付けるコリドンが、結果的に重大なミソジニーに陥ってしまうのだ。また、コリドンが発情期の雌の匂いの強さを指摘する一節に付けられた脚注で、脚注の「私」は、牝牛同士の場合は雄との交尾の「模倣」であり、「馬鹿げている」(C, p.66)と述べる。『コリドン』では、女性同性愛は基本的に無視され、折に触れて嘲笑されるのである。さらに語彙の面でも、一九一八年の『日記』で、男性同性愛者を分類する際に、「異性に対して女のようにふるまい……本当のアンヴェルティの役を演じる」異性愛者の男性が、侮蔑的に「レスビアン (Les-bien)」(U, p.103)と呼ばれている。

(10) ホモソーシャリティとは「同性間の社会的な絆」を指

す。この概念を文芸批評の領域に持ち込んだのはセジュウィックである。彼女が『クローゼットの認識論』と並ぶ主著『男たちのあいだで』で指摘するように、男性のホモソーシャリティとホモセクシュアリティの関係は時代や地域で大きく異なっている。たとえばコリドンが模範として仰ぐ古代ギリシアの市民階級では、男性のホモソーシャルな絆には、年長の男性と少年との性行為が制度的に含まれていた。それに対して、近代社会の男性のホモソーシャルな絆はどんなにエロティシズムをたたえていようと(エロティシズムをたたえているからこそ)、強烈なホモフォビアによってホモセクシュアル(同性愛者)を排斥し、私的領域に追いやった女性との間のヘテロセクシュアリティを標榜することで、「正しいセクシュアリティ」の規範を維持しようとする。セジュウィックの明晰な言葉を借りれば、近代社会の男性のホモソーシャリティとホモセクシュアリティは「連続性なき連続体」になっているのだ(イヴ・コソフスキー・セジュウィック、邦題『男同士の絆―イギリス文学とホモソーシャルな欲望―』(上原早苗、亀澤美由紀訳)、二〇〇一年(原著一九八五年)、名古屋大学出版会、一―七、三三四頁)。なお、「ホモセクシュアリティ」と「ホモエロティシズム」をともに含意する「同性愛」という日本語ではホモソーシャリティの重要な論点を

隠蔽してしまう恐れがあるため、ここでは英語の読み方で表記した。

(11) 『コリドン』のホモフォビアに関して、『ランヴェルテュ』の排除が『コリドン』においてジッドが同性愛の擁護と見なしたのもっとも魅力に欠ける一面」だと Leo Bersani は指摘する。(Leo Bersani, *Homos*, Harvard University Press, 1995, p.121)

(12) 『一粒の麦』の出版につづいてはフレイヤッド版の Pierre Masson の註を参考にした。André Gide, *Souvenirs et voyages*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2001, pp.1098-1109.

(13) Jonathan Dollimore はジッドの本質主義とフレイルドの反本質主義を徹底的に対比させ、ジッドの「深さ」、フレイルドの「表面」の重要性を指摘する。だが本稿でも述べるように、『一粒の麦』において「表面」すなわち皮膚はきわめて大きな役割を果たしている。確かにジッドは同性愛に関して本質主義的な見解を示すが、時にはその枠組みからの重大な逸脱も見せている。(Jonathan Dollimore, *Sexual dissidence: Augustine to Wilde, Freud to Foucault*, Clarendon Press, 1991, pp.3, 14-5)

(14) Michael Lucey はダニエルが「タンティの装い」をしており、彼とモハメッドの性行為は「退廃的で、デカダ

ンな文化の一部」として提示されていると述べる。

(Michael Lucey, *Gide's bent sexuality, politics, writing*, Oxford University Press, 1995, p.36)

(15) 健全な男同士のエロスの象徴としてのホイットマンは、『コリドン』の導入部分で、次のような三段論法で用いられる。ホイットマンは「ノーマルな人間」である、しかるに「ホイットマンはペデラスト」である、したがって「ペデラステイはノーマルな性向」である。(C, p.17)。

(16) ダニエル以上にその役割を与えられるのがダグラス卿である。ダニエルとモハメッドの行為が記述された直後に「ダグラスと現地の少年アリ(「私」と砂漠で関係を持った少年ではない)」との挿話が語られる。ダニエルは「アラジン」(Sf, p.313) のように着飾らせたアリと別の少年との「怪しげな情事」(Sf, p.315) には興味を示すのだが、彼が少女を求めることは許さず、しまいにはアリアを「ひどく鞭打」(Sf, p.316) ち、滞在中のホテルを大騒ぎにさせてしまう。ここでも「私」はあくまでも傍観者としてとどまり、騒動とは無関係なふりをする。つまり、語り手はダニエルやダグラスを過剰なまでに貪欲で、「暴力」的な性の消費者と位置づけることで、「私」の「快樂」を支えている植民地主義的な不平等から読者の目をそらさせようとするのである。

(17) 一九二一年五月十四日の『日記』で、ジッドはブルーストに関して「ユラニスムを否定したり、隠したりするところからは程遠く、彼は誇示した。ひけらかすと云ってほしいほどだった」(JL, p.1124)と記している。一方、『一粒の麦』の「私」はダグラスの会話の「慎みのなき」に「極度の気まずさ」(St, p.315)を覚える。「ユラニスム」の誇示という点でブルーストとダグラスは結びつく。

(18) たとえばジッドの『地の糧』(一八九七年)や『背徳者』(一九〇二年)でも、マグレブやノルマンディを舞台に、念入りにコード化された形ではあるが、男性間のエロスが繰り広げられている。

(61) 『マ・ベルジュ』誌 (*Les Marges* 1926, Gat-Kitsch-Camp, 1993) は、ラシルドやフランソワ・モーリヤックら同時代の作家二十六人にアンケートを行なう。多くの回答者は男性同性愛が文学的な「流行」(*Les Marges*, op.cit., pp.21, 34, 35, 39, 41, 46, 50)であるが一種の「スノビズム」(*Ibid.*, pp.28, 30, 34, 36, 38)になっていると指摘し、ブルーストやジッドと関連付ける(ブルーストやシャルリュスに言及しているのは十二人、ジッドやコリドンに言及しているのは十一人、重複あり。ただし『レ・マルジュ』の特集の時点では『一粒の麦』の公刊はまだである)。一方、ポルシェは著書『あえてその名を言わぬ愛』

(François Porché, *L'amour qui n'ose pas dire son nom*, Grasset, 1927) で一九二〇年代の「ある種の変化」(Porché, op.cit., p.19)を認め、『ソドムとモモラ』を「非順応者たちのナンソの勅令」(*Ibid.*, p.10)と呼ぶ。ジッドに対しては「控えめなジッド」、「大胆なジッド」、「無謀なジッド」(*Ibid.*, pp.172, 186, 208)と三章に渡り段階的に分析する。冷静で、緻密な読解を行なうポルシェであるが、結論では彼自身が属するパリの「文壇」で男性同性愛が「増殖した」ことを「危険」(*Ibid.*, p.228)と見なし、急速に語気を荒げる。一九二〇年代のフランスの文芸批評が男性同性愛にいかに取り組んだかに関しては、本稿では問題を提起するにとどめ、今後の課題としたい。

一〇〇四年 五月 十日受稿
一〇〇四年 五月 二八日レフェリーの審査
を経て掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)